

松本じゅん子, 野坂俊弥, 北山秋雄
(長野県看護大学看護学部)

要旨: 本研究では, 南信地域の大学生を対象に, その地域で聴かれる自然の音に対する印象評価及び音から想像される風景の印象評価を調べた. その結果, 音への印象評価については, 活動性がやや高く感じられていた. また, 音から想像した風景に対しては, 情緒のみやや高い傾向がみられた. 先行研究と比較して, 都市部の大学生よりも, 全体的に音から特に強い印象を受けず, 音から想像した風景についても, やや情緒を感じるのみであったことから, 音に対する既知感によって音への印象に影響が及ぼされている可能性が考えられた.

キーワード: 音の印象評価, サウンドスケープ, 視覚的景観, 音環境, 自然環境

目的

サウンドスケープとは, 音の風景, 聴覚的景観という意味であり, 視覚的景観に対して提唱されたものである. これまでの研究から, 音は視覚的景観に系統的影響を及ぼすことが示されており (岩宮, 2001; 岩宮・細野・福田, 1992 他)^{1,2}, それらは視覚と聴覚の相互作用である共鳴現象によるものが主であると指摘されている. 一方, 視覚的景観が音の印象に影響することも明らかにされている (宮川・鈴木・青野他, 2000; 田村・鈴木・鹿島, 1992)^{3,4}. これらのことから, 景観を考える際には, 視覚的景観だけではなく, 音も重要な要素として含める必要がある.

しかし, 自然が多く, 騒音等の問題があまり生じない地域では, 音環境についてはあまり注意が向けられてきていないが, 南信地域で聴かれる音への印象については, 情緒といった特色があることが示唆されている (松本・野坂・北山他, 2008)⁵. しかし, その地域に馴染みのある場合とそうでない場合とではそれらの音への印象が異なる可能性も考えられる. 本研究では, 南信地域の大学生を対象に, 自然の音の印象を検討した. 加えて, 音から想起される風景の印象についても調べた.

方法

被験者: 南信地域のA市内の大学に通う大学生30名 (男性14名, 女性16名). 平均年齢22.43歳.

刺激: A市内で録音した10種類の自然の音. 提示時間は, 各30秒であった.

印象評価: 音の印象評価については, 岩宮・細野・福田 (1992)²を参考に, 「落ち着きの無い-落ち着

いた」(1-7点)等のSD尺度17項目を使用した. 音から想起される風景の印象評価についても, 岩宮・細野・福田 (1992)²を参考に, 「緑が少ない-緑が多い」(1-7点)等のSD尺度18項目を使用した.

手続き: 10種類の音を順に提示しながら, 各音の印象について評定させた. 次に, 同じ10種類の音に対して, 音から想像した風景の印象を評定させた. 実験は個別に行った. 実験の所要時間は, 35-45分程度であった. 実験の実施は, 2008年2月から3月であった. また, 本研究の実施に関しては, 長野県看護大学倫理委員会の承認を得た (2008年1月23日, 審査番号25).

結果と考察

音の印象: 10刺激に対する印象について因子分析を行った結果, 4因子が抽出され, それぞれ「活動性」, 「快適さ」, 「個性」, 「情緒」と命名した. 次に, 下位尺度を構成する項目の合計点を項目数で割ったものをそれぞれの得点とし, 刺激ごとに得点を算出した. 一部の音において, 活動性のみやや高い傾向が示されたが, 特徴的な印象はみられなかった (Figure1).

音から想像した風景の印象: 10刺激から想像した風景の印象について因子分析を行った結果, 4因子が抽出され, 「活動性」, 「快適さ」, 「情緒」, 「個性」と命名した. 上記と同様に各得点を算出したところ, 一部の音で情緒のみがやや高い傾向がみられた (Figure2).

以上の結果から, 刺激として使用した音に対する印象及びそれらの音から想像される風景の両方に関して, 活動性, 快適さ, 個性, 情緒といった側面が

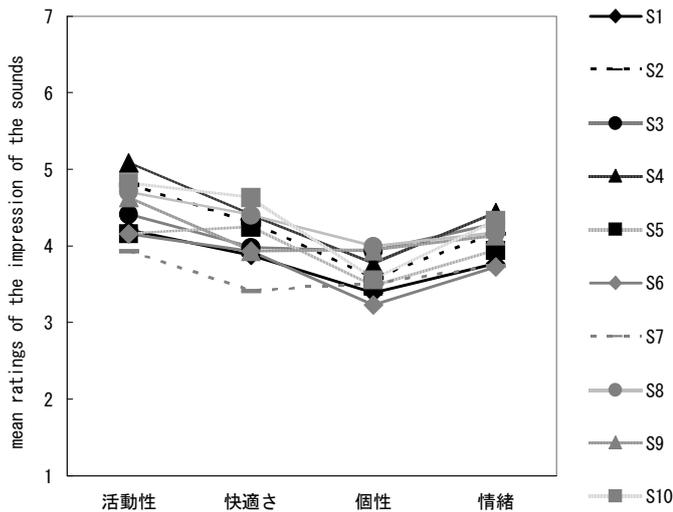


Figure1 Mean ratings of the impression of each sound

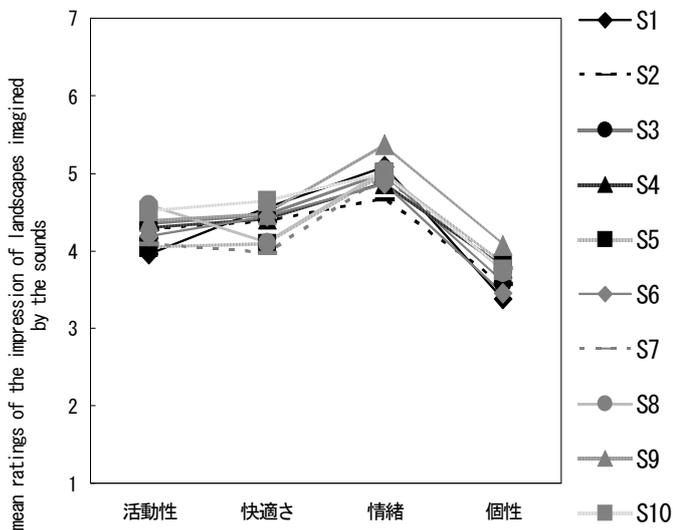


Figure2 Mean ratings of the impression of each landscape imagined by the sounds

あり、音の印象については活動性のみがやや強く、音から想像した風景については、情緒のみがやや強く感じられる傾向が示唆された。また、音の印象及び音から想像した風景のいずれにおいても、複数の音の印象のパターンはそれぞれ類似していた (Figure1, 2)。

音に対する印象の構造は、他の地域の大学生を対象として同じ実験刺激を用いた先行研究と大きな差異はみられなかった (松本・野坂・北山他, 2008)⁵。しかし、音に対する印象評価については、他の地域の大学生の方が、音によっては活動性や快適さ、情緒等をより強く感じていた。したがって、印象評価の構造は被験者の居住地に関連せず類似したもの

であるが、都市部に居住している大学生に比べ、本地域の大学生においては、各音に対する印象は弱いものといえる。その原因としては、音に対する既知感が影響している可能性が考えられ、本地域の大学生では、用いた音に対する既知感が高く、印象が薄くなった可能性が推察される。反対に、都市部の学生では、聴いた音への既知感が低く、それらの音がむしろ新鮮に感じられ、印象が強くなっていることが考えられる。しかし、本研究では個別に実験を行ったが、都市部の大学生については、集団で実験を行ったため、実験条件の違いによって印象評価の差異が生じている可能性もあり、今後検討する必要がある。さらに、集団によって音の印象評価が異なっていたことから、音から及ぼされる心理的・生理的影響も異なることが予測され、この点に関しても検討する必要があると考えられる。

文献

- 1) 岩宮眞一郎: 音と景観の相互作用. 環境管理 37 (6) : 39-44, 2001.
- 2) 岩宮眞一郎, 細野晴雄, 福田一昭: 音環境と景観の相互作用-景観の印象に及ぼす音環境の影響と音環境の印象に及ぼす景観の影響-. 日本生理人類学会誌 11: 51-59, 1992.
- 3) 宮川雅充, 鈴木真一, 青野正二, 他: 視覚情報が種々の環境音の印象に与える影響. 日本音響学会誌 56 (6) : 427-436, 2000.
- 4) 田村明弘, 鈴木弘之, 鹿島教昭: 植樹帯による喧噪感の緩和. 日本音響学会誌 48 (11) : 776-785, 1992.
- 5) 松本じゅん子, 野坂俊弥, 北山秋雄, 他: 南信地域のサウンドスケープに関する研究. 平成 19 年度長野県看護大学研究集会, 2008.

本研究は、平成 19 年度長野県看護大学特別研究費補助金 (「南信地域の自然環境が心身に及ぼす影響」研究代表者: 松本じゅん子) の補助を得た。また、実験において、東京大学大学院総合文化研究科 角恵理氏の協力を得た。